
こんなマリオでもいいじゃないか！！

匿名希望

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなマリオでもいいじゃないか！！

【Zコード】

Z9233Y

【作者名】

匿名希望

【あらすじ】

20××年、キノ王国のピーチ姫が自称・大魔王クッパに誘拐された！

自分の欲求を満たす+ピーチ姫を助けるためにマリオは冒険へ。マリオと他作品の愉快な仲間達が繰り広げるファンタスティックアドベンチャーが始まる！

この小説は誰でも感想が書けます！

第一話 「冒険だらー？」 ピコマツオ（前書き）

どうも匿名れす。

予定よりはやく出来たんで投降します。

しつかしテストが終わつたらまたテスト……世の中腐つてますね
(笑)

ではスタートです。

第1話 「冒険だろー?」 b y マリオ

20XX年 9月

自称・現役スーパー配管工」とマリオは悩んでいた。

四年前、俺は「ドンキーコング事件」でその名を一躍世界に轟かせた。

自分と弟主役の対戦ゲームの発売、テニス審判へのスカウト、ビル解体、ピンボールゲームのギャラリー etc……

様々な職、経験に彼の毎日は非常に充実していた。

だが……そんな生活に俺は、徐々に物足りなさを感じていた。

だからテニスの審判、ビル解体の仕事もあつといつまに辞めてしまつた。

「一体、俺の欲求はどうしたら満たされるのだろうか？」

「そんな欲求不満を抱えたまま今日も適当に寝転がりながら新聞を読む。」

「ふと巨大な記事に眼がいく、何々…ピーチ姫誘拐だと…？」

「そうか一国の姫が攫われたのか、どうりで朝から騒がしいわけだ。」

「にしてもまさか一国の姫様が誘拐されるなんてね」

「全くだ、しかも一部の兵士達もその事件に参加したみたいだな。」

「主を裏切つてどこの出かも知れん相手に着くなんて、随分馬鹿というか阿保といふか……。」

「にしても犯人と思われるカメ一族のクッパとは…？」

「何だ、さつきから心の中で猛つてこる」の…何ともいえない、衝動的なものは…？」

「…………どうしたんだい兄さん、さつきからやけに体が震えてるけど？」

「え？ そ、 そつか？」

「やはり……」の衝動的なモノは氣のせいじゃないのか！？」

「俺に足りないもの……その答えに今俺は限りなく近づいてる氣がす

二〇〇〇

「そ、そうえばその犯人グループは何処へ？」

「拠点は突き止めてね、ここよ、けじ月中に姫様がいるんで今は動けないみたい」

そりやそうだろうな…変に行動を起こせば最悪、ピーチ姫を人質にとられる恐れがある。

もう少し…もう少しだけ…答えが見つかりそうな、気がする…！

「拠点までの... 地図つてあるか?」

「記事の裏側に拡大かして貼つて有るけど…それがどうかしたのか
い？」

次の瞬間、俺は衝動的に新聞をかつさらうとすぐさま手荷物を準備していた。

そしてあつという間に家を出でいた、これまでの時間・約20秒。

何故このような行動をとったのか。 そう、 それは答えが見つかったから。

俺に足りない物は

冒険だア ああああああああああああああああああああああ

!

つてな訳で冒険ついでにピーチ姫を助けに行く事にしました。

ルイージ、留守番任せたぜ！

「.....」

唚然、これが今の僕の心境だ。

突然、兄さんが震えだしたと思つたら新聞紙片手に荷物作つて出て行つた。

あまりに動作が速すぎてクロツアブやつたんじやないかと思つたよ、マジで。

.....あれ、まさか僕留守番役？

まさか出番もこれだけじゃ

第1話 「冒険だらー?」 ピコマリオ(後書き)

ちなみにこの作品のジャンルはファンタスティックアドベンチャーです。

お間違いなく。

第2話 旅×敵×味方? (前書き)

第2話です、サブタイは某ハンター漫画風にしてみました。

?マークはキノコがかわりです。

ゆつくり小説執筆...と思ったら1~2月1日によまたテストが.....。

「第2話 ? 1 P L A Y E R G A M E
2 P L A Y E R G A M E

マリオ 「第2話、レッヅエゴオー!..」

第2話 旅×敵×味方？

青い空、真っ白な雲、緑の山々、生茂る野草や筑紫。

「ああ……これだッ！ 僕が求めていたのはこいつのだったんだツー！」

マリオはまるでフィギュアスケート選手のようにグルグルと鮮やかに三回転を決める。

長い長い欲求不満から脱した彼の心はストレスなんて見えないくらい透き通っていた。

「さて、まずは景色を堪能 ん？」

踊っていたマリオの視線にマリオのほうに真っ直ぐ歩いてくる者がいる。

マリオシリーズの名雑魚キャラ・クリボーだ。

彼等は元々はキノコ王国側の兵士だったのだがクッパの起こした事件に伴つてクッパ側に寝返つたのだ。

「オイ、お前は何者だ！？」

マリオに気づいたクリボーは荒々しくマリオに迫る。

迫つてくるクリボーに対し、マリオは全く動じずハア…とため息をつく。

「俺の名前を知らないとはな……まあいい、俺はマリオ…お前を殺す人間だあああああああ…！」

「ダニイツー？」

雄叫びとともに猪突猛進の勢いで向かつて来るマリオに思わずクリボーがたじろぐ。

マリオはトウツー…といつ掛け声と共に宙へ舞つと

グチャヤ！

「ひでぶツー！」

……全体重をかけクリボーの脳漿をブチ撒いた。

「ハツ、どうだ！ これが俺の実りよ

」

攻撃から三十秒経過、ふと自分の足元に転がっているクリボーの死体を見たマリオは

「うああ…おげえ……えふ…」

胃の中の物を吐きつぶしたマリオは口元を手で拭うと覚束ない足取りで立ち上がる。

死体には一度と眼をやらなこと誓ったマリオは再び歩き出した。

じぱりと床に浮くブロックを見つけた。

レンガで出来たブロック、？マークがかかった黄色いブロック。どちらも重力に逆らい、ふかふかと浮いている。

見たこともないブロックを脳にしたマリオの「ソニック」は一気に上昇する。

次々と素手でブロックを叩き割つていいくと黄色いブロックからキノコが出てきた。

これこそ皆さん御存知、マリオの必須アイテム・スーパークリコである。

これを食べる事によつてマリオはスーパーマリオになれるのだ。

だが当然、そんな事をマリオが知っているわけがない。

「美味そうだな……どれ……」

ヒヨイと口の中に入れると歯でキノコを噛み千切り磨り潰しスーパー・キノコを味わう。

四、五回噛んで飲み込み一口田を喰らおうとした時、

! !

突然のスーパー・キノコの砲撃にマリオは思わずキノコを放し耳を塞ぐ。

「……あ、あの～…………どう様で、しょうか…………？」

「べべつながらもおずおずとマリオが話し掛ける。

「スーパー・キノコじや、ボケエ！… ところでテメエ！ 何で俺を食いやがった！…？」

「あ、いやあ… そのあ… おいしそうだったんで……つい」

完全に説教ムードに包まれた周囲、キノコが人間に説教されてるこの構図、実にシユールである。

「いいか!? 僕等はな、こぞとこうときアンタを助けるよひよ
ーチ姫から言われててな（ゝゝ）」

説教が長くなるので省略します

数時間後

「わかれればいいんだ、わかれれば。さあて、お前にそろそろ力を分け
てやるぜ」

「マジですか！？」

まあなど鼻で笑いながらキノコが言つ。

「 ルーラー ゲゼ オルハーブ ああああああああああああああああ
ああああああああああ 」

「……………」

まばゆい光に包まれたマリオ、気がつくと背が伸びてゐる」と云つて、

まさかこれだけかよ…と普通なら思うが低身長がコンプレックスだったマリオには歓喜以外の何者でもなかつた。

「わが八百」

アイテムの力を借り力を得たマリオ、そんなマリオの旅はまだまだ
続く！！

to be continued

。

第2話 旅×敵×味方？（後書き）

後半ややいい加減になっちゃいました、スミマセン。
ではまた次回〜。

「NGシーン」

「俺の名前を知らないとはな……まあいい、俺はマリオ…お前を殺す人間だああああああああーー！」

「ダニーアツー？」

「ゴシャツー！」

テリュ、テリュ、テリュ、テリュ、テリュ、テリュ、テリュ、テリュ、テリュ、

『GAME OVER』

第3話 四年ぶりの再会が変わらないは十分な時間です（前書き）

「ココリです、今回まことにかげココリです。

皆さん御存知、どういわなをやめ（る）

マリオ「第3話、ひあいりージー・...」

四年という屯田は「リラ」が変わるために十分な時間です

「アサヒ・リバウンド」

甲羅を蹴り飛ばし、3のクリボーを一気に吹き飛ばす。

「……………」

更に無敵アイテム・スター+燃える花(?)・ファイヤーフラワーを取ったマリオはまさに無双だった。

虹色に光る体のままクリボーの列を吹き飛ばす、ノコノコをファイ
ヤーボールで燃やす。

敵にとつては正に地獄絵図といつても過言ではなかつた。

「だあはつはつはつはつ！－俺、最強！」

完全に天狗となつたマリオはファイヤーボールを連射しクリボーを

燃やしていく。

しばらく浮かれていたマリオだったが、ゴールバーが見えた途端懐から地図を取り出し眼を通す。

「……と、あの城がゴールか

案外楽勝だったな、と若干の物足りなさを感じるマリオ。

階段を上り華麗に舞つと、ゴールバーの先端にちよびっと指を当てて城の上に着地する。

ゴールバーの旗が降りるのを確認するとマリオは城の中へと入っていった……。

俺の視界には今、とんでもない奴が写っている。

そこには4年前となにも変わらぬ、俺同様に眼を瞑開き驚愕している。

互いに惚れはしないその顔…………まさかの4年前の”宿敵”との再開とは……。

「……なんだお前がこんなところにいるんだ……ゾンキー……。」

「……でよ、最近この奴が”算数なんて出来るわけない!”って
言ふ出でてな」

「へえ……、『リリラ』にも勉強嫌いがいるもんなんだな」

互いに胡坐をかきながら何気ない話をすむ二人。

一体何故この二人、こんな風になつてんのかー…?

遡ること、3分前

「ドンキー、お前なんでこんなとこひどい？」

「おおマリオじゃないかウホ、久しづりウホ」

ドンキーの応答にマリオは思わずはあ？と頭にクロスチョンマークを浮かべる。

それもそのはず、4年前彼等は敵同士でありその因縁は今でも続いているヒマリオは思っていた。

だがドンキーは違った、話を聞くうちマリオは彼のその後について知った。

ドンキーは自らの罪を認め、見事更生したのだ。

まあ最もあの事件の裏にはただドンキーが婚期終盤だったので一国も早く誰かと結婚したかったといつ逸話があるのだが。

「ほう、ペーチ姫を助けるために旅をしてるウホか？」

「いやペーチ姫救出はおまけ、俺はただ冒険を楽しみたいだけなんだ」

「ええ！？ 優先順位がおかしくないか、ソレ！？」

マリオの発言にドンキーの突っ込みがはいる。

突っ込み時のみ語尾にウホをつけなくなるのは仕様です。

「で、お前は何でこんなトコに？..」

「ああ、実は俺も同じでペーチ姫を救出するために旅をしてるウホ」とウホの言葉に、マリオは思い出す。

「まあこれも何かの縁ウホ、俺もお前の旅に同行していいウホか？」

「まあ、構わねえよ。どうせ最終的には俺もクッパ城へ行くしな」

「ああ、構わねえよ。どうせ最終的には俺もクッパ城へ行くしな」

「せうか、じゅあしざばりくよひじくウホ」

「ああ」

二人は軽く握手をすると城の扉を開け次なるステージへと向かったのだつた……。

おまけ

「次のステージは多分、ア・オア・一みたいな感じだと予想」

「ねえーよー！ 絶対、ありえねえだろソレー？」

to
be
con-
tinued
.....

第3話 四年といつもマリオが変わらなければ十分な時間です（後書き）

マリオの旅にドンキーが同行。

…ってかゴリラに婚期もくそもあつたのだろうか……？

ちなみに基本マリオがボケ、ドンキーが突っ込みです。

ではまた次回～。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9233y/>

こんなマリオでもいいじゃないか！！

2011年12月1日20時50分発行